

戦争を知らない世代へ 45 長崎編

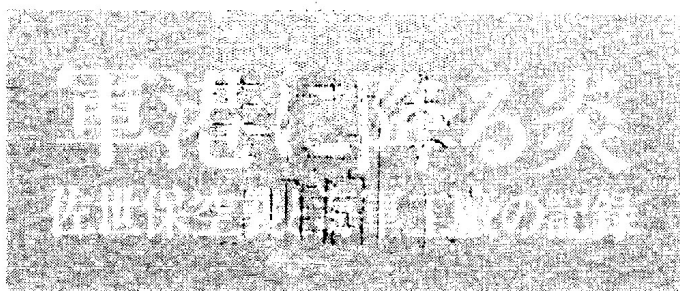
軍港に降る炎

佐世保空襲と海軍工廠の記録

創価学会青年部反戦出版委員会

第三文明社

戦争を知らない世代へ ④5 長崎編



創価学会青年部反戦出版委員会

第三文明社

戦争を知らない世代へ㊤

軍港に降る炎—佐世保空襲と海軍工廠の記録

昭和53年8月7日 初版第1刷発行

編者◎ 創価学会青年部反戦出版委員会

発行者 栗生一郎

発行所 株式会社 第三文明社

郵便番号 101 東京都千代田区猿樂町2-5-4

振替 東京5—117823 電話03(294)8731(代)

印刷所 凸版印刷株式会社

製本所 株式会社 星共社

落丁・乱丁本はお取り換え致します 0036—7045—4438

1978 Printed in Japan

発刊の辞

終戦から三十三年を経過した今日、今なお、佐世保市民にとって拭い去ることのできない一つの忌わしい記憶がある。昭和二十年六月二十九日の未明――。無気味な爆音を響かせて飛来したB 29の編隊は、低空から焼夷弾を雨と降らせた。たちまち炎は町中を荒れ狂い、一夜にして軍港の町をなめ尽し、千数十人の尊い生命を奪い去った。

この佐世保大空襲の史実は、ナガサキ原爆の陰にかくれ、同じ県内でも知らない人が多い。まして、戦後世代の若者にとっては、なおさらのことである。

私たち創価学会長崎県青年部では、四十九年に反戦出版に着手して以来、五十二年までに五冊の被爆体験集を発刊した。昨年で当初の目標を達した私たちは、さらに幅広い戦争体験の証言を収録しようと、佐世保大空襲に目を向けて昨年秋からその準備に取りかかった。

私たちの趣旨に賛同された空襲の犠牲者の方、遺族の方から相次ぎ手記が寄せられた。切々と

綴られた行間から、大空襲のすさまじい光景が再現される。照明弾に映し出されるB 29の機体、昼間と見間違ふほどの火の海、悲鳴、叫び、逃げ惑う人影……。恐怖に満ちた体験と苦悩に包まれた半生が三十三年の歴史の空白を越えて胸を打つ。とりわけ高齢の方の証言には、あの日の惨劇を生あるうちに、という悲痛な思いが込められているようで、証言運動の重みを今さらながら実感した次第である。

今、佐世保には造船不況の大波が押し寄せている。かつては軍港として栄えたこの町から、ドッグの灯が消えようとしている。——これもまた皮肉な宿命といえようか。

二年ほど前、佐世保が「むつ」入港問題で大揺れに揺れている時、同地を訪れたことがある。町の表情は、反対派の宣伝カーのかん高い音とは裏腹に、予想外の平静さであった。「生活さえてけりゃ、賛成でも反対でもどっちでもよかと」——繁華街の商店主が吐き捨てるようにいった言葉が妙に印象に残っている。

不況はさらに深刻さを加え、一部では不景気の打開策として「戦争でも起きてくれれば」といったささやきもかわされているという。

真実の叫びほど強いものはない。この証言集は、三十余年にして世に出た赤裸々な戦争反対の叫びである。この平和を希求するささやかな試みが、いつの日か、市民総和の確かな平和の防波

堤となることを願ってやまない。

昭和五十三年六月二十九日

創価学会青年部

長崎県青年部長 江下敏雄

目次

発刊の辞

第一章 火の海に見た戦争の恐怖

ちぎれた腕に風呂敷包みが.....	武富好子	11
戦禍の中で送った青春時代.....	松村ラク子	19
空襲警報を心待ちにしていた少年.....	田島直郎	22
防空壕で窒息死した赤ちゃん.....	松本サチ代	26
動けなくなった私.....	吉原ワリ	28
東京でも、佐世保でも.....	山口義博	32
あの悲惨を繰り返してはならない.....	竹永八重	37
十八歳で死んだ兄.....	野中總子	41
火の海に生きた心地もなく.....	木戸ミツ子	44
四度も死の危機に直面.....	松本兼夫	47
受話器を耳に死んだ人たち.....	南里チヨ子	54
もう最後と感じた大空襲.....	神山シゲ子	57
二十歳の青春.....	江口テル子	62

第二章 哀しみの涙も涸れて

恐怖に震えながら過ごした夜……………五条堀桂一郎

四十二歳で犠牲になった母……………山家義一

生きながらの火葬……………松尾八重子

今なお残る戦争の傷跡……………福永政子

空襲で我が子を亡くす……………江口房代

同僚たちが次々と……………山家ミツエ

泥水の中で一夜を明かす……………蛭子せつ子

ただ恐怖感だけが……………大石国代

壕で蒸し焼きにされた人々……………久保勝子

生きているのが不思議だった……………大久保仁子

空襲で妻子を亡くした人と結婚……………香田アヤ子

第三章 焼跡にただずんだあの日

残ったのは貯金通帳だけ……………福田光枝

焼夷弾の音が花火のように……………楠本義見

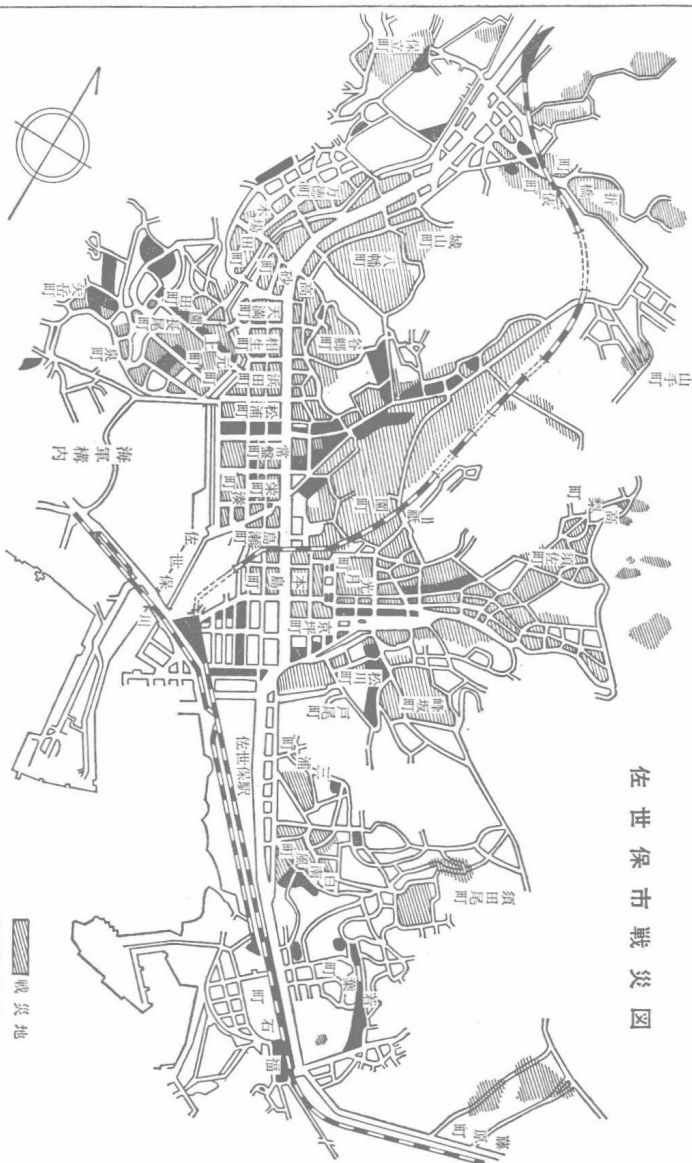
久しぶりに帰った我が家で.....	沖田平一	122
押入れの空気.....	東内 博	125
次々に落ちてくる焼夷弾.....	末富清吉	129
友の救援に人の情を知る.....	宮西笑子	132
バケツリレーで力つきた私.....	川崎スワ	138
涙で供出したボチ.....	山口正人	140
今なお見るあの日の悪夢.....	西山ウラ	144
「戦争が憎い」と妻の辞世.....	関 一男	147
焼跡にたたずむ弟.....	荒牧誠美	150
川の中での一夜.....	田中鷹江	153

第四章 癒えることない戦争の傷跡

この幸せな日々をいつまでも.....	佐田隆興	159
生命に焼きついた戦争の悲惨さ.....	神山孝次郎	162
今も残る母の胸の傷跡.....	酒井正春	165
子孫に伝えたい戦火の姿.....	瀬戸美佐子	170
平和を守りつづける人間に.....	山口 登	175

第一章

火の海に見た戦争の恐怖



佐世保市史より転載

第一章

火の海に見た戦争の恐怖

ちぎれた腕に風呂敷包みが



武富 好子（59歳）

当時・女学校一年生

一昨年の二月に小学校時代の同窓会があり、三十一年ぶりの集まりに幾人の人々が集まるかしら、となかば半信半疑で、今なお連絡をとり合い戦後もずっとつき合いをしている二、三名の友だちとその会場におもむきました。会場に入ったとたん、私の思いとは反対に三十人あまりの人があちこちにかたまって、昔話に花を咲かせていました。なかにはちょっと思い出せない方、またはわんぱく坊主で手をやいていた人が今では会社の社長にと、それぞれ立派に成長され、目をみはるばかりでした。

その時に、戦時中一足先に疎開し、戦災をまぬがれた友だちが戦時中に写した写真をわざわざ持ってきて、見せてくださったのです。その一枚一枚のなかに、あのいまわしい空襲の夜を思い出し、その時に亡くなった友だちのオカッパ頭や顔を見て涙しました。あの生まれて初めて経験した恐ろしい空襲の夜のことを、私は昨日のようにありありと思い出したのです。

その時の私は女学校の一年生になったばかりでした。六月二十八日の夜はすごい雨の日でした。

その日私と妹は、祖母の家に遊びにいき、「今夜はここに泊まって明日おばあちゃんの所から学校に行くわ」とだだをこねていました。いつもは、「それならそうしなさい」と言ってくれる祖母が、その夜にかぎって、「今夜は帰りなさい。また別の日にでも泊まっていきなさい」と雨の中を帰宅するように言うのです。

虫の知らせとでもいうのか。その夜に帰っていなければ果たしてどんなになっていたか……。妹と二人雨にぬれながら家に帰って、お風呂に入り洗った髪にいくどとなく櫛を入れ床についたのです。空襲がはじまったのはそれから何時間もたたない……。そうです、やすんですぐだったと思います。

寝入りばなのせいか夢うつつのなかに、何か騒々しい声に目を覚まし、はっと気づいた時、枕元の床の間に焼夷弾がまっすぐに落ち、火花のように火を吹いているのです。それをすばやく父は庭に向かって投げ捨てました。それを手はじめに焼夷弾が竹をたたくような音をたて、数メートルおきにドンドンと雨が降るように落ち続けるのです。私はモンペのボタンをとめようとしても手が震えてうまくとまらず、そのあたりにある紐のようなもので腰を結んでいました。それも後で気づいたことです。

家中黒い幕でおおってあるので外は見えず、「家から火の手を上げるな」と父は風呂場の水やあちこちにある水をかけていましたが、母は下の弟が生まれて十日ほどだったために、あまり動

くこともできず、最後に逃げるつもりで外に出たとたん、外はもう火の海で一步も出られません。そのうち二階の階段も燃え出し、電線に火がついて天井を矢のように火花が走り、立っている板の間から火がチラチラとのぞくのです。生きた心地さえしませんでした。

父は私に、「何でもいいから足にはけ、けがをするぞ」と大声で言うのですが、玄関は煙で下駄などは見えません。「そうだ、学校の上履があった」と思っ、いつも下げていた靴袋を見つけているのですが、これまた見あたらず（あわてていたのか見落としたのかもしれません）、とうとう裏口に回って手さぐりで捜したものを足にはいたのでした。

後になって自分の足元を見て皆が笑うのでつい下を見ると、片方の足は男物の大きな下駄、片方の足は捨てるつもりで置いていた高下駄の古いのをかたちんばにはいているのです。まあよくも転ばなかったものだ和我ながらびっくりしました。

そうやっているうちに火は床の下に回りはじめ、畳がブスブスと落ち込んでいきます。いよいよ火に囲まれてしまいました。水をかぶって少しでも身体をぬらして、と井戸端までゆくと井戸の上の藤棚の上に、隣りの家の燃木が落ちかかってくるではありませんか。「ここも危ない」と思わず家の中に飛び込んで、どこへ行こうかと、あちこち燃えている家の中を逃げ回りました。

その時、庭先にある防空壕に気がつきました。この防空壕は庭の岩を横穴式に掘って中には三つの部屋を作り、出入口が三カ所もある大きな壕なのですが、警察や軍の方々が調べに來られた

時、「ここは爆弾の時は良いが焼夷弾攻撃の時は窒息の恐れがある」との注意があったので、ふだんは使うこともなかったのです。しかし、ほかに行く所もなくそこへ逃げ込みました。

近所の人々も何人かはそこへ入られたようですが、ここは危険だと言って途中で出た人が、後で焼死体となって見つかりました。妹と弟たちは隣りのおじさんの声にそのままついて行ったようで、どこへ行ったかわからず残ったのは両親と私と生まれたばかりの弟だけ。壕に入ったのは入ったのですが、そこそ生き地獄でした。煙でそばにいる父の顔も見えません。息をすれば喉はつまるようで苦しく、父はなるだけ腹ばいになってじっとしていなさいと言います。

そのうちに、壕の戸に火がつきはじめ、父はそばにあったトタン板を立てて防ぎました。一升瓶などに入れて昨日まで壕の中に置いていた水は、水を入れ替えるためほとんど外に出していて一本もないのです。あるのは岩肌を伝ってくぼみにたまっている山水だけです。そのわずかな水で顔をしめらせ熱さをしのぎました。

じっと動かずにいると、そのままずっと気が遠くなるようです。父は、「眠ってはだめだ」と戸を押さえながら、足で私の身体をけるのです。そのたびに私ははっと気づき、意識が返ってきます。あの時、もし私が一人だったらと思うと今でもぞっとします。

上の家が焼け落ちるまでの蒸し殺されそうな熱さと息苦しき。それまでは少しでも家が焼け残ってくれますようにと願っていたのが、早く焼け落ちてくれ、そうすれば少しは火力が弱くなる、